

- 『日本考古学年報』27 東京
 ———— (1946c) : 「十勝太海岸段丘チャシコツ遺跡」『日本考古学年報』27 東京
 ———— (1976 d) : 「十勝川口チャシコツ遺跡」『日本考古学年報』27 東京
 ———— 河村七五三喜 (1974) : 「乙部チャシコツについて」『十勝考古』1 浦幌
 ———— 石橋次雄 (1975) : 「十勝埋蔵文化財分布調査報告 I (幕別町)」幕別
 ———— 佐藤芳雄 (1978) : 「霧止山チャシ跡について」『浦幌町郷土博物館報告』11
 浦幌
 斎藤米太郎 (1935) : 『郷土先史民族砦跡』 大津

- 佐々木力夫 (1965) : 「十勝郡浦幌町幾千世出土の土器」『釧路市立郷土博物館々報』160.
 161.162合併号 釧路
 豊頃町教育委員会 (1977) : 『豊頃町埋蔵文化財分布調査報告』 豊頃
 永田方正 (1891) : 『北海道蝦夷語地名解』 札幌
 北海道教育委員会 (1976) : 『北海道のチャシ』 札幌
 間宮不二雄 (1947) : 『浦幌村五十年沿革史』 浦幌
 目黒治助 (1977) : 「本別の先住民族」『本別町史』 本別

浦幌町の淡水魚類の分布

松 本 尚 志

▼はじめに

報告の標題は、「浦幌町の淡水魚類の分布」としてある。しかし、厳密にいえばその中には、一生を淡水中で過ごす純淡水魚の他に、産卵期に河川を遡上あるいは降海し特定の時期を河川で過ごす遡河性または降海性魚類とその陸封型または河川型があり、汽水域をその主な生息場所とするものもある。ここでは、そのすべてを含めてとりあげている。いわば、浦幌町内の河川及び沼に生息する全魚類のレポートとして読んでほしい。

淡水魚類は、海産魚類にくらべると一部を除いて産業上の価値が低い。特に水（海）産業の発達した日本では、淡水魚類は人々の関心をよばなかつた。そのため調査もあまり行なわれなかつた。しかし、子供の頃故郷の小川で小さな淡水魚を追いまわして夕暮れを迎えた記憶のない人は少なくないだろう。そうした意味では、親しみのある仲間であった。最近では、河川の汚染がすすむに従って、淡水魚類はその種類も數も激減し、いわば死に近づいた河川も多くなり、この面からも河川の生物に関心を寄せる人々も多くなり、調査も行なわれるようになった。

浦幌町内を流れる河川は少ない訳ではない。だが、河川の汚染は例外ではなく加えて河川工事に

よる流路の直線化などで、淡水魚類はそのすみ家を奪われている。その結果、遡河性のものや清流を好む種類は、その姿を消しつつある。代ってエゾウグイを中心とした比較的汚染に強い魚類のみが目立つようになってしまった。

『浦幌町史』をはじめとする開拓の歴史をひもとけば、そこには浦幌川の上流にまで遡河性の魚類が数多く見られたと記されている。今日では夢のような話である。私の報告は、いまの時点で町内に生息する淡水魚類について行なうが、これ以上種類が減るようなことがないよう心から希望したい。

まとめるにあたって一部に私自身が確認できず他の人によるものもあるが、その場合必ず複数の人に対する確認をしていただいた。

この稿の終りには一覧表を付してあるが、そこでは確認してはいないが、生息する可能性のある種も加えてある。本文中のものは確認されたものであるが、一部に調査が不十分であったり、どうしても疑問が残るものはその旨記してある。

分布に重点をおいているためにすべてにわたって詳細に記述することは避けている。記載にあたっては、①和名（俗名・混称があれば記す）②その生態・特徴。③近似の種との比較。④分布の順

とした。

▼スナヤツメ

夏の気温の高い時期には、水面を体をくねらせて波紋をつくり泳ぐのが見られる。本来は魚類ではなく円口綱に属し、頸、胸びれ、腹びれがない。食用にはならず、20cmに達しない。同属のカワヤツメは食用になり降海するが、本種は一生を淡水で過ごす。浦幌川及びその支流のほぼ全域、静内川の上流にまで分布している。カワヤツメは見ることができないが、利別川高島堰堤に産するので全くいきれないとは言いきれない。

▼サケ（俗称アキアジ）

淡水魚として扱うのも不思議なくらいであるが、浦幌十勝川、浦幌川下流及びウツナイ川、更に一部は支流にまで出現することがある。昭和51年には静内川の上流の浅瀬で発見された。サケ漁は、日本の水産業の中でも特別重要な位置をもち、サケは孵化事業の主たる対象である。浦幌町も本年5月29日浦幌・厚内の両河川に、200万尾の稚魚放流を行なった。しかし、サケは清澄な流れを必要とする魚類である。公共用水域の水質保全のための許容限度基準でも水産用水のサケ科に関してはきびしい規定があるし、指定「サケマス増殖河川」「放流河川」ではその流域の保護について厳重な農地開発・工事の制限が行なわれているのが実情であり、そうした対策なしには成功はおぼつかない。

▼サクラマス=ヤマメ（俗称マス=ヤマベ）

サケと同様に遡河産卵性の魚類である。降海せずに河川に残留した雄を中心とするものがヤマメである。孵化し、一年を川で過ごし、春の融雪水の終るころ集団で降海するが、この時期のものを銀毛ヤマメと呼ぶ。浦幌では毎年5月10日前後に降る。形は普通のヤマメより細長い感じで、銀白色に輝き、パークマークも淡く、手にとると鱗がはがれやすい。成魚であるマスも浦幌川下流までが遡河の限界で、陸封型ヤマメは静内川上流、常室川中流、留真川上流、瀬多来川の一部に細々と残存しているにすぎない。遠からず絶滅するであろう。

▼ニジマス

本稿で扱った魚類中唯一の外来種である。北米太平洋岸河川が原産地である。明治10年（1877）

はじめて日本に移植されたものだが、飼いやすいので、現在では日本各地に広まっている。冷水域を好みが適応範囲が17~20°Cまでと広く、養魚場を逃げだしたものが自然繁殖している河川も多くなりつつある。最近になって浦幌川にも出現するようになつた（1978.7.6）。だが、数は少なく自然繁殖しているとは思えない。

▼アメマス=エゾイワナ（俗称イワナ）



河川型 1977.5.5 浦幌静内川 全長 210mm

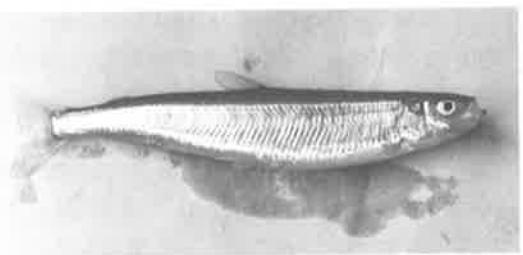
海産のものは銀白色であるが、河川に遡上すると白点が目立つようになる。河川に残留するものは、腹部が黄ないし赤色をおび、背部は紫色に近い灰色から緑がかった色まで、河川毎に体色の差が現われる。遡河、降海性のアメマスは、ウツナイ川、トイトッキ沼、浦幌十勝川、直別川下流などに分布し、河川型は静内川上流、常室川上流、留真川上流などに少数ではあるが生息している。

なお、近似種であるオショロコマの河川型は、カラフトイワナとも言われ、十勝川水系の支流の最上流に生息するが、浦幌にはおそらく分布しないと思われる。

▼キュウリウオ（俗称キュウリ）

沿岸に分布するが産卵期遡上する。独特な臭いからその名がついたもの。河口附近から下流に見られる。浦幌十勝川、ウツナイ川、トイトッキ沼に分布する。昭和53年5月21日には、浦幌川統太まで遡河しているが、こうした例は稀である。

▼ワカサギ（俗称チカ）



1977.12.29 トイトッキ沼 全長 110mm

沿岸や海に連なる湖・沼・河川に生息するが、

陸封されたままのものも多い。近似種のイシカリワカサギは純淡水魚でよく似るが、縦列鱗数からみると浦幌産は写真でも鮮明だが60~62あり、ワカサギとして良い。12月下旬、トイトッキ沼と浦幌十勝川に集中し日を追って旧浦幌川の下頃辺川合流点附近まで移動する。

▼チカ

ワカサギに似るがより大型。かつ腹びれが背びれの前端真下より後方で始まることで前種と区別できる。汽水域にだけ出現する。浦幌十勝川河口のみ。

▼シシャモ

沿岸に分布、10~12月に浦幌では2回位短期間に集団で遡上産卵する。十勝川茂岩大橋附近まで遡河するが、旧渡舟場附近の河床が産卵場になるらしい。浦幌十勝川では支流新川に孵化場がある。

▼ウグイ（俗称アカハラ）

水質の汚染に強く、強酸性にもよく耐える。そのために生息数も多い。春、集団で遡上し産卵する。全長40cmに達する。雄は生殖期に頭部を中心として大型の追い星を生ずるが、婚姻色は雌雄ともに3列の朱赤色の縦条として現われる。アカハラとも呼ばれるのはそのためである。浦幌十勝川に連絡する河川、直別川などの下流域・中流域、浦幌川では留真附近まで広く分布するが、汽水域では一部にマルタと呼ばれる大形の別種も混じるようである。

▼エゾウグイ（俗称ウグイ、クチボソ）

ウグイと同じような生態を示すが、より小形である。婚姻色も眼下に短い一条と下腹部に縦条が現われるだけである。ヤマメ、アメマスが生息する河川では、最上流域を除くが、あらゆる河川、沼の全域に分布する。汚染が進むにつれて、多くの魚類が姿を消す中で優先種となりつつある。産卵期はウグイより遅れるようである。クチボソと呼ばれるものは夏以降出現し、大型のものが多く40cmに近いものもある。頭部などの形も違い、別種ではないかという疑問をもち続けている。

▼ヤチウグイ

体の大きさにくらべると眼が大きく、側線がはじめ下方に湾曲している。うろこがはがれやすく尾部に多い黒点が不規則に並ぶ。体が小さく、10cm以下がほとんどである。その名のとおり、沼とそれに続く細流、排水路などに生息する。万年か

ら南の旧河川、沼に分布している。万年東寺の沢川の沼、笹田沼の鉄道線路北側の部分などでは群棲している。

▼フナ

『原色日本淡水魚類図鑑（宮地ほか、1963）によれば、キンブナは体色赤褐色で金色光沢をおび背びれは3棘（11）12~13（14）軟条、側線鱗数（27）28~29（30）、胸びれの基部は肥厚せず、より底生的で河川よりも泥底の沼、池を好む。ギンブナは体色綠褐色で青みをおびた銀白色光沢。背びれは3棘（15）16~17（18）軟条、側線鱗数は（28）29~30（31）、胸びれは丸く短く、基部が筋肉質で肥厚する。泥底を好み、流れのゆるやかな川、平野部の湖、沼などにも生息し、産卵期には雌ばかりとある。実際に夏に釣りあげたものは、ほとんど雌ばかりで私もギンブナとして扱っていた。しかし、今回調べてみるとこの記述に異なる点が多く、疑問も深まってきた。1978年8月27日浦幌十勝川の下頃辺川合流点附近で捕えたものは、全長18.8cm、体長15.8cm、頭長4.5cm、体高5.3cmで、背びれ3棘13軟条、尻びれ3棘6軟条腹びれ1棘7軟条、側線鱗数32、頭長比3.5体高比3.0、第1鰓耙数38、脊椎骨数28の雌であった。この結果から見る限りこの個体はかなりキンブナ的である。従って、この報告ではキンブナ、ギンブナの区別を避け一括してフナとして扱うこととする。

フナは、浦幌十勝川、浦幌川、下頃辺川及びそれに続く河川・三日月沼などに生息している。しかし、最近では河川の直線化で姿を消し（中北川など）、加えて汚染のために異常を認めるものも多くなっている。浦幌十勝川のものも体側に血が浮き、背びれの一部が溶けているものもあったが、下坂宅裏万年川（通称長沼）で採集したものは、悲惨といふべきであった。全8尾中、一見正常と思われたもの僅かに1尾で、尾びれの半分が溶けているもの、吻部がくずれているもの各1尾、体の一部がえぐられたように肉が露出しているもの2尾、体の一部に血が浮いているもの3尾であった。

なお、この後数日で沼の水は涸れてしまった。ウグイと並んで汚染に耐えるとされているフナがこの惨状である。他の種類では、奇形になる前に絶滅するのではないかと思う。重ねて河川保護の

重要性を訴えたい。

▼コ イ

野生のものもあるが、養鯉場から脱け出して繁殖したものもかなり多いのであろう。十勝川などの旧河川跡の沼には1mを越えるものもいるようだが、浦幌川では45cm程度のものが最大である。浦幌川でもほぼ浦幌市街を含みその下流に分布するが数は少ない。吉野から豊北方面の河跡沼に多く生息している。

▼フクドジョウ（俗称ドジョウ）

ドジョウは口ひげが10本あるが、この種は6本である。また、ドジョウの尾びれはなめらかな円形であるのにこれは一般の魚類並みに直線で切れる形である。全体として体形にまるみがなく、はっきり区別できる。その上、雄は背面黒色であるが雌は黒色が区切られて斑紋状に見える。浦幌川につながるほとんどの支流・細流にまで分布する。ドジョウの方は見たことはないが、利別川とその支流に生息しているので生息する可能性がある。

▼ウナギ

道東では塘路湖及び達古武沼で知られているが本来放流したものである。従って、日高地方より東部では珍しいが吉野から豊北方面にかけての河跡沼に生息する。ウナギは、日本列島南方の深海で産卵し、黒潮に運ばれて日本に達し、遡河するもので、浦幌産のものが果して天然のものか疑問も感じているが、昭和51年9月には三日月沼で長さ86cm、重さ1.48kgの大物が上っている。また、笹田沼につながる通称牧場沼でも釣り上げた人がいるので、吉野～豊北方面の河跡沼には生息していることは明らかである。

▼イバラトミヨ（俗称トゲウオ、トンギョ）

背びれの棘は7～9本が多く稀に12本まである。浦幌産のものでは宮の沢川（東山公園）では8～10本、万年川（下坂宅裏）では10本であった。緑がかかった金属光沢が体色であるが生殖期の雄では黒っぽくなる。純淡水産で細流を好みが沼などにも多い。浦幌でもほとんどの河川、その支流・細流、沼などに生息している。近似種にトミヨ、エゾトミヨがある。後者は釧路方面では生息しているので、生息の可能性はある。背びれの棘の数が8～13、その大部分が10以上と多く、長さも復びれの棘とともに極めて短く、尾柄も著しく短いので区別できる。

▼イトヨ（俗称トゲウオ、トンギョ）

背びれの棘が太く3本で、イバラトミヨより大型になる。雄の婚姻色は背部からブルー、腹部から朱赤色で美しい。降海性で、そのため汽水域で稚魚が群棲していることが多い。流れのゆるやかな溜りを好み、ダム放水口の下などに群れているのが見られる。厚内川ではかなり上流で見られたが、ポンオコッペ川などの小川の下流にも生息する。

▼ボ ラ

全世界に分布しているが、北海道・東北には少ないとされている。本来は沿岸に生息するが、幼魚は遡河性をもつ。トイツキ沼にも生息するが数は少なく、稀に網に入る。

▼ビリング

この種については自信がない。個体によってかなり変化があるからである。また、河川による差も大きく、琵琶湖特産とされるイサザとしか考えられない個体もあったからである。ビリングではなく、ジュズカケハゼの可能性もあり、あるいはウキゴリの可能性もある。これらはすべて腹びれが合一して吸盤になっているハゼ科である。いずれこの種については、深い検討が行なわれなければならない。生息河川は直別川河口、トイツキ沼、旧浦幌川（下頃辺川との合流点）などである。

▼ハナカジカ（俗称カジカ、ドンカチ）

背部の尾側に近く3条（2条がはっきり）の横条がある。小形のものが多いが、浦幌川でも18cm位のものも生息する。こうした大型の雄では胸びれの表面には、こぶのような突起物が並ぶ。浦幌・十勝川につながるすべての河川の中・上流域からその支流・細流の最上域（静内川・川流布川・アリヤス川など）にまで分布している。

▼ヌマガレイ



1977.10.10 浦幌十勝川 全長 160cm

大形のものは見られず15cm以下のものがほとん

どである。本来沿岸魚であるが、汽水域はおろかかなり上流まで遡上しているものもある。眼のある側は両側とされているが、写真で見るとおり浦幌産のものは左側である。浦幌十勝川河口に群生するほかトイトッキ沼にも入り、一部は浦幌十勝川と下頃辺川の合流点にまで遡上している。

▼あとがき

一覧表に明らかなように、確実に浦幌町に分布する淡水魚は少なくとも23種に及ぶ。調査を終えて何かほっとした気持である。しかし、サケ科について言えばニジマスを除いて絶滅に近い状況にある。環境の保全は小手先ではできない。これ以上姿を消してしまう魚類のないよう基本的な対策を強く望みたい。

なお、本稿をまとめるとあたり多くの人々の協力をいただいた。心から感謝したい。

No.	種名	科名
14	コイ	ク
15	ドジョウ (?)	ドジョウ科
16	フクドジョウ	ク
17	ウナギ	ウナギ科
18	イバラトミヨ	トゲウオ科
19	イトヨ	ク
20	ボラ	ボラ科
21	ビリング	ハゼ科
22	ハナカジカ	カジカ科
23	スナガレイ	カレイ科

*スナヤツメは円口綱であるが、一般的な扱いによった。

*?印については本文中の解説を読んでほしい。

*ヤマメは、北海道ではヤマベが通称であるが混同を避けるため正式な呼称にしたがった。

(浦幌中学校教諭)

浦幌町内産淡水魚類一覧表

No.	種名	科名
1	スナヤツメ	ヤツメウナギ科
2	サケ	サケ科
3	サクラマス (ヤマメ)	ク
4	ニジマス	ク
5	アメマス	ク
6	キュウリウオ	キュウリウオ科
7	ワカサギ	ク
8	チカ	ク
9	シシャモ	ク
10	ウグイ	コイ科
11	エゾウグイ (クチボソ?)	ク
12	ヤチウグイ	ク
13	フナ	ク

参考文献

- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦 (1963) 『原色日本淡水魚類図鑑』 保育社
 中村守純 (1963) 『原色淡水魚検索図鑑』 北隆館
 小林喜雄 (1967) 『北海道の淡水魚』 北海道大学水産資料館
 山代昭三 (1977) 「魚類」 『釧路湿原』 釧路朝日新聞社 (1967) 『北洋水族館』 朝日新聞社
 中村守純 (1976) 『釣りの魚・川 湖沼編』 平凡社
 市川健夫 (1977) 『日本のサケ その文化誌と漁』 日本放送文化協会
 松本尚志 (1968) 『仙美里の魚類——利別川に住む魚——』 本別

生剛村旧市街の街並み形成について

安藤龍逸*・後藤秀彦**

I

「生剛村」とは「浦幌町」の旧称である。生剛村は現在の統太・生剛・養老地区を中心として旧市街を形成していたが、1903(明治36)年12月浦

幌駅の開業に伴い、1905(明治38)年生剛外二戸長役場を現市街に移転し現在の姿になったものである。この間、1906(明治39)年には二級村制の施行に伴い行政区画を改め、十勝村を大津村